

あの子を守る、あの人を救う

中 三

児童虐待や子供の虐待死はまだまだゼロにならない。

「○○ちゃんが自宅で亡くなっているのが発見されました。○○ちゃんは日常的に虐待を受けていた可能性があり……」といったニュースが報道される。そして、その子供が、かわいらしい笑顔を向けた写真が出る。胸がきゅつと痛くなった。私の父は怒りをにじませた声で「まだこんなことをする親がいるのか。」と言い、妹も「かわいそう……。」と顔をしかめてつぶやく。私も許せなかった。腹が立った。子供の命は親のものなんかじゃないのに。子供が一人殺されたことへの怒りや悲しみでいっぱいになっていた。

あの子は母に、または父に愛してほしかったはずだ。愛され、守られ、大切にされ、大きくなりたかったはずだ。それなのに、愛してほしいと願った人の手によって体や心を傷つけられ、願いも叶わず、小さな命は弱り、やがて消えてしまう。

そんな悲しいことってないだろう。

しかし、母親の心も壊れていたのかもしれないと思った。小さな命を死まで追い込んだことは本当に許されないことだが、もしかしたら、母親自身が一人で、辛かったのかもしれない。子供が生まれて母になったが、自覚することや実感することができず、泣いている小さな小さな生き物を前にして、どうしていいのかわからなかったのかも。泣きやんでくれない。言うことを聞いてくれない。育児の悩みや疲れを相談できる人もいない。もうどうしていいのかわからない。辛い。疲れた。そんな思いを一人で抱えて、虐待や育児放棄に走ってしまったのかもしれない。

だから、虐待をする親を責めているばかりではダメだ。親の精神や心が限界になって、我が子を手にかけるその前に、虐待される子供を救うと同時に、親の心も救うように、誰かが手を差し伸べないと、何の問題も解決しないのではないかと思う。もし、「あなたはがんばっているよ」と母親の心にそっと寄り添い、眠る時間や休む時間を十分に与え、地域が、社会が、みんなが助けて、一人の子供と一人の母親を包んで守ることができた

なら、あの人はありのままに我が子に愛情を注ぎ、あの子も全身で愛を受け取って、守られ、大事にされて、大きくなるのができたかもしれない。

「子供が泣いているのがよく聞こえる。虐待かも。」という近所に住む人、「あざがある。もしかして……」という保育士。「でも違ったら……」、「自信がない、おせっかいかも……」と見ないふりをしてしまう、行動に移せない、何もできない、そんな人が一歩行動に移す勇気をもてたら、もつと救える命があるのだろう。「おせっかい」なんて言葉は、頭をよぎった瞬間からかき消して、自分から手を差し伸べていけるといい。

それは「虐待」のことだけではない。一番身近なことかというと、学校での「いじめ」だ。もちろん、そんなことは起こらないのが一番よいが、私も「まさか」「もしかして」と感じたなら、誰かのSOSが伝わったら、目を逸らさずに、勇気をもって動ける人間になりたい。私一人ができることは少ないかもしれないが、いじめられている子に「私がいるよ」と寄り添い、ほんの少しでも誰かの力になりたい。

少しの勇気をもって、少しでも早い行動を、み

んなが。あの人の心が壊れてしまう前に。あの子の心の傷が増える前に、そもそも傷つく前に。小さな命が消えてしまうその前に。